# 「京都創生の概要・課題等について」

静岡文化芸術大学長，国際日本文化研究センター客員教授
**川　勝　平　太** 委員

（第２回会議　平成17年10月21日）

私は京都の御所の裁判所の前で育ちました。入学したのは富有小学校，今の御所南小学校です。途中で引っ越し，卒業したのは衣笠小学校。衣笠中学校に進み，洛星高校を卒業するまで京都におり，大学は早稲田に進み，早稲田大学で長く教鞭をとってまいりました。1998年に国際日本文化研究センターに赴任して今日にいたりました。

国際日本文化研究センター（日文研）は1997年に設立された国立の研究機関です。日本文化を内外の学者と学際的，総合的，国際的に共同で研究して世界に発信するのを目的とした機関で，桂坂の上の京都を睥睨する場所にございます。

さて，京都創生は，今から２年前，日文研の初代所長，梅原猛先生が「京都創生を国家戦略とするべきである」と提言されたものですが，その趣旨は，794年に都になって以来，日本で最も豊かな歴史を持つ京都を世界に発信するために国が京都創生基金を創設し，法律を設けて電柱の埋設，景観保全の処置など，京都を本来の姿に戻そうというものです。多くの人が賛同し100人委員会が設けられました。パンフレットを見ますと，例えば京都造形芸術大学のある教授は，「京都を愛している，しかし，国家のために京都を称揚することは賛成できない」と言われ，森村誠一さんのように「京都は日本の宝。同時に世界に誇る歴史的文化遺産」という人がいるかと思えば，渡辺淳一さんのように「京都人の伝統にあぐらをかく態度を改めない限り，再生は難しい」など，100人の見解が一致しているわけではありませんが，日本が観光立国をめざす中で，日本の宝であり世界の宝でもある京都を発信していこうという趣旨にはみな賛同されています。

京都と金沢は先の戦争で爆撃されなかったのには，いろんな理由があるでしょうが，「京都も金沢も美しいからだ」といわれます。美は力に勝るということでしょう。

子どもに歴史を教える際，奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代という風に教えます。時代名はみな地名です。何でもないことのようですが，世界史年表をご覧になりますと，地名で時代区分している国はありません。地名は，権力機構の置かれた場所名です。権力の所在地名で時代区分すると日本の歴史がよく分かる。日本はそんな歴史を持っています。

その中で京都はどんな位置にあるかというと，これは私の独断ですが，奈良・平安京都は，唐の長安を模した場所です。長安は北京から内陸に500キロ入ったところです。大陸のど真ん中。その文化を最初は奈良に，そして平安京都に入れました。京都は古代の大陸中国文明の生きた博物館です。

次の鎌倉時代，中国は南宋の時代で，南宋は元寇を日本と一緒に受けています。元寇で

滅ぼされるとき南宋の学者が日本に逃げ込んできます。その学者を鎌倉の北条家が非常に大切にしました。鎌倉に五山，例えば建長寺は蘭渓道隆，円覚寺は無学祖元が開山です。亡命学者です。五山は，今日でいえば大学です。そこに弟子が集まり，武士も参禅して勉強した学問所です。朱子の出たのも南宋の時代です。都が揚子江の河口，東シナ海に面した所に，1120年代から1270年代まで150年間あって，当時「臨安」（と言いましたが現在の杭州）に都があって，中国の南の文化のエッセンスが鎌倉に見事に入るのです。それが鎌倉五山です。五山は南宋の時代に中国で作られたものを鎌倉が模倣しました。鎌倉は中国の南の文化の生きた博物館です。目に見える形では，禅・庭・茶です。こういう特徴がある。

それを京都から見ていると，「何や鎌倉の田舎者がようやりよるやないか。」こういう訳で，後醍醐天皇が京都にも五山が欲しいと運動され，室町幕府がそれを引き継ぎ，南禅寺を筆頭に京都五山。学問所が立ち並びます。その風情は禅・庭・茶がかもすものです。室町時代は，金閣寺・銀閣寺が有名ですが，いずれも京都の町の周辺にあり，京都の中心には中国の北の文化をいれていたので，その周辺に中国の南の文化を入れ込んだのです。言い換えますと，京都には中国の北から南までの文化のエッセンスがあります。中国の文化はインドやチベットやさらにシルクロードを通じてユーラシアの文化を入れ込んでいます。要するに東洋の文化のエッセンスが全部京都にある。京都は，日本の宝，世界の宝と言われるのはそのとおりですが，同時に，アジアの宝です。

そのあとは江戸時代ですが，江戸は上方からみれば文化果つる所です。上方から100年かけて文化を入れ，人口こそ100万になったものの，京都上方に劣等感がありました。さらに，100年かけて「花の都のお江戸でござる」というテレビの番組があったりしますが，京都を抜いたという意識が出てくるわけです。これは京都が江戸を助けてあげたのですが。ここで，大事なことは江戸時代の日本には，外国のモデルがなかったということです。江戸の文化を支えたのは，京都に入ってきたアジアの文化のエキスであり，それが基礎になって江戸で花を咲かせました。明治以降その遺産を食い潰してきました。そして明治以降の近代化のなかで，東京は西洋文明の生きた博物館に転身しました。

金沢は裏日本と言われたりしましたが，発展から取り残されたことがかえってそれが江戸の文化を残すことになりました。京都はアジアの文化のエッセンス。一方，アジアの文化から自立した日本の姿を今日に示しているのが加賀百万石の中心の金沢です。そういう意味で京都と金沢は連携してやれば，強みが発揮できると思います。

その後，明治維新以降，欧米に追いつき，追い抜きました。追い抜いた後，日本の国の形を変えようというのが現在です。なぜ追い抜いたといえるかと言いますと，日本はGDP 500兆円，これは一人当たりに直すとアメリカと変わりません。一定程度の文化水準，教育水準を享受できている先進国の代表は，アメリカ，日本，ドイツ，フランス，イギリス，イタリア，カナダ，この７カ国です。日本は自他ともに認める先進国になっています。

さて，京都は学問文化の中心地で，立派な大学がいくつもあり，ノーベル賞受賞者も出

しています。昔と風情がちがうのは，東寺にしても，延暦寺にしてもそこに先生がお住まいになり，その学徳に惹かれて学者や学生が修行するという場所でした。今日でも東福寺は管長がいらして，単なる建物ではありません。そこにお住まいになっている。それが昔の大学の姿です。今の大学は建物だけで夜になれば真っ暗で守衛しかいない。そこに生活がない。これからは，大学を建てるときには総長はそこに住むべきだと思います。近代日本の大学はヨーロッパの大学の模倣ですが，オックスフォードやケンブリッジにしても，学者の動物園ともいうべき非常に変わった独創的な学者がその辺をうろうろしている。京都もそれができる。立派な学者がいる生活空間をつくれば，佇まいはかつての京都五山をはるかに超えるものになるに違いありません。

それから，子どもの教育ですが，先程「京都市スチューデントシティー・ファイナンスパーク」の説明がありましたが，スチューデントシティーの場合は，５年生対象。ファイナンスパークのほうは中学１，２年。４歳くらい年の差がありますね。このように，年齢差のある子どもたちが一緒にいるということが大切だと思います。皆様方が子どものときもそうだったと思いますが，私は御所で遊んでいました。そこには年齢が上の子も下の子も一緒にいますので，一緒にいる時間や場所がありましたが，今はそういう年の違う子どもたちが一緒の時間，空間を持つことが少なくなっています。それをどうしたらいいか。一緒に住んだらいい。かわいい子には旅をさせる。１学期，２学期，３学期のそれぞれ８週間ずつでも，その間は寄宿舎付きの学校に預けます。土日だけは家に戻します。学校の先生も校内に住んでいないといけません。学校の先生は教室で前だけ見せている。教室から出て職員室へ帰って，あとはもう校門から出たら背中が見えない。背中が見えないと先生は先生らしくなくなります。背中を見せることが大事です。例えば合宿で大八木淳史先生はいつも後ろが見られるので，おもしろい。前もすごいけども横もすごいと。ようするに360度全部見られています。寝ている姿も見られている，ということで，私も大八木先生のようになりたいというようなことになっても，とてもできない，ということから自分の限界を知ったり，目標を設定したりするわけです。全人格的に見られると，人間は自覚し，先生は先生らしくなる。そういうふうなことが京都でできないか。できると，京都に新しい学問，教育の光が出てくると思います。

それから京都市は京北町を合併し，京北町は右京区になりました。あそこには光厳天皇のお寺（常照皇寺）がございます。実に奥行きのある，京都の奥座敷のようなところで，そういう地域は北にも南にもあります。100人委員会では京都市だけではなくて，特別委員として府知事，市長さんもお入りになっております。都のイメージが京都市内だけでやったらもったいない，と思います。ずっと奥座敷の日本海から，京阪奈まで視野にいれ，京阪奈の学研都市に京都府庁が移れば，やっぱり京都は近畿の中心だなというのが実感できるでしょう。市内の子と，府の緑豊かなところで生活している子の交流が，お互いにあこがれるということが出来るはずなのです。

京都創生にはそういう思い切ったこともやってみるとか，今の教育のシステムとちょっと違う冒険をやってみる。老いも若きも一緒に住もうという，先生には老い，若い，いろ

んな人がいますから，その人たちと中学生，高校生が授業のある学期中は一緒に住む。学期が終われば帰ります。そうすると，家族の温かさがわかり，家族もよく帰ってきたと大事にする，そういうメリハリをつけることが大切です。どこかで実践してみたいですね。特にあちこち廃校になっていますから，それを上手に利用してやってみたらどうか。日文研も，外国の先生だけ住まわせているが日本人は住まわせない。宿舎は研究所と同じ建築様式で建てられています。内井昭蔵先生の名建築です。ところが彼らは，日本人と差別して，なぜ我々を，いわば唐人屋敷に閉じ込めるのか。日本人と一緒に生活しようと思ってきたのにとこぼしていますね，留学生会館は外国人と日本人を区別する鎖国方式です。外国人と日本人を区別しないように，同じところに住むと，そこに面白い学者の動物園ができる。それは我々自身の課題でもあり，問題でもあると感じております。

長くなりましたが，日本は明治以来の「力の文明」から美しい国づくりに乗り出し「美の文明」へと転換する時期にあります。京都はアジア文明の生きた博物館です。京都は美の文明を体現していて，そして何よりもそれを輝かすのは人間ですので京都創生委員会の人たちを軸に京都創生塾，100人会塾，拡大100人会塾を創生して，これから10年くらいをにらんだ計画をたて，いろんな提言を語って頂き，本当のスチューデントシティーを作る。その中にティーチャーズシティーも一緒に入れる，とこういうことをやっていくと教育再生と文化創生とができることになり，再生すなわち京都ルネッサンスになると思う次第です。御清聴ありがとうございました。